

平成28年度からの地域学ゼミナールの導入について

Planning of Introductory Seminar of PBL and Regional Science

藤 崎 浩 幸 *

Hiroyuki FUJISAKI

※本稿は、2015年8月28日に開催された第65回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会第3分科会「高大接続・初年次教育・キャリア教育」において発表した内容をまとめたものであり、同研究集録p.100～p.103の原稿に一部加筆したものである。

キーワード：初年次教育、PBL、地域学、学部横断クラス

要旨：弘前大学では平成28年度から新しい教養教育のスタディスキル導入科目（全学生必修）として、既設の1年次前期基礎ゼミナール（学部学科ごとのクラス）に加えて、1年次後期に学部横断クラスで地域をテーマにPBL教育を行う地域学ゼミナールを新設することとなった。筆者はその準備作業を担当している。1チーム6人、1クラス最大15チーム90人を教員3名がチームティーチングし、チームの一員としての力と課題解決力を6つの観点でルーブリックを用い評価するといった運営案作成を踏まえ、平成27年度前期2クラス、後期4クラスの試行を通じた実施案構築を進めている。前期試行から、チームティーチングの有効性、PBLとしての質の追求よりもチームビルディングが重要であることなどが判明したので、授業計画などを修正しワークシートひな型を準備して後期試行を行っている。しかし、学生による現場での情報収集への対応など未解決課題も存在する。

1. 地域学ゼミナールと弘前大学の新しい教養教育

弘前大学では平成28年度から従来の21世紀教育に変えて新しい教養教育を開始する。その基本コンセプトとして「主体的・能動的学習への転換」「文理融合教育による多元的な視点や思考法の獲得」「国際共通語としての英語能力の獲得」「地域志向性（地域が持つ強みや課題の理解、課題解決へ意欲等）の涵養」「国際性（異文化理解、多文化共生等）の涵養」が掲げられた。

これを踏まえ、全学生必修科目となるスタディスキル導入科目として、従来から実施している1年次前期の基礎ゼミナールに加えて、1年次後期に地域学ゼミナールを新設することとなった。

基礎ゼミナールは、従来と同様に、学部・学科ごとにクラス編成を行い、入学した学部・学科への帰属意識を高めると同時に、高校から大学への学びの転換を図る科目である。

一方、新たに導入される地域学ゼミナールでは、1）学部横断クラス編成、2）地域（弘前、津軽、青森）に関する内容をテーマとしたPBLという2つのコンセプトが掲げられた。そして、2～4年次の選択必修科目である、文理の学生が同一クラスで履修し、地域（弘前、津軽、青森）に関する内容に

*21世紀教育センター副センター長（農学生命科学部）
Deputy Director of Centre of 21st Century Education (Faculty of Agriculture and Life Science)

ついて、専門知識を活用した学生参加型学修を行う学部越境型地域志向科目群に接続する科目と位置付けられた。

著者は、この授業の具体化を担当するワーキンググループの代表として、その実施準備作業を担っている。本報告では、地域学ゼミナール運営案の概要と平成27年度前期の試行状況、本格実施に向けた課題について述べる。

2. 地域学ゼミナール運営の立案

まず、地域学ゼミナールの達成目標について、2つのコンセプトを踏まえ、①学部横断チームの一員として自分の役割を認識し行動できること、②学部横断チームの一員として他者の役割を判断し適切に働きかけることができること、③地域の問題に関する資料（情報）の検索・収集・整理ができること、④発表会で適切な行動ができること、⑤地域が有している課題を発見できること、⑥地域が有している課題に対し、解決策を提案できること、と設定した。基礎ゼミナール、あるいは大学の多くの既存科目との最大の違いは、学部横断の学生で構成されたチームで共同作業を行うことにありと見え、チームの一員としての行動力を筆頭に掲げ、地域に関するPBLとしての課題発見力や課題解決力とを含めた目標とした。

次に授業運営における教員の役割については、各チームのファシリテートと進捗状況管理に留めることとし、PBL課題は担当教員の専門に依存しない共通課題を設定することとした。このため授業担当教員への手引きを作成した。教員の役割を、その専門に依存しないようにした理由は、まず、教員の専門に依存したPBL教育に相当する学部越境型地域志向科目群が2年次以降に用意されているからである。また、学籍番号により機械的に学部横断でクラス編成する全学部必修の科目であることを考慮した際に、クラスによる学習内容の差異が大きいと、受講学生からクラスの当たり外れという不満が出てくることを危惧したためである。さらに、弘前大学では教養教育の運営を全学の全教員担当で行っている（1教員あたりの最低限の教養教育担当時間数が定められている）ので、これまでに存在していない挑戦的な授業内容の担当教員を、全学部から集めなければならない、という事情も考慮した。専門に依存しないPBL課題としては、市役所等のWebページから情報が得やすいことを考慮し、「弘前市の特性を活かした子育て支援」と「観光を考える－交流人口増加を目指して」という2つの課題を準備した。

授業計画は、1) ガイダンス/チームビルディング、2) ブレーンストーミングとKJ法演習/課題説明、3)～5) 問題発見プロセスの体験、6)～8) 発見した問題点に関する発表準備/発表会、9) 授業前半の振り返り/ゲストスピーカーによる解説、10)～12) 発見した問題点のうち1つ程度に対する課題解決プロセスの体験、13)～15) 課題解決方策の発表準備/発表会/授業全体の振り返り、という流れとした。このうち、妙案が思いつかず授業への導入をちゅうちょしているのが学外調査である。地域に関する授業という観点からは、受講学生が自発的に積極的に地域の中で調査を遂行することは大変好ましい。しかし、1学年1400名近い学生が、同じような時期に五月雨的に地域内へ出ていくことは、受入れ側の地域にとって負担が大きいと考えた。そこで学外調査の代案として、第9回目にゲストスピーカーによる解説を行う計画となっている。そして各回の授業では、1) 各チーム員が分担して授業外の時間に作業した情報の共有、2) 作業した情報の整理・分析・意見交換、3) 次回の授業までに各チーム員が授業時間外の時間に行うべき作業分担の決定という3段階で行う流れとした。

クラス編成については、講義室数の事情から、1学年1400人弱全員が同一時間帯で一斉に開講することは困難であると考えた。弘前大学では、人文学部、教育学部、医学部医学科、医学部保健学科、理工学部、農学生命科学部の6学部相当であるので、文理融合を意識して、3学部ごとの2群に分け編成することとした。PBLを行う1チームの人数は、チームのまとまりと授業運営バランスを考慮して6人を標準とすることとした。そして学部横断クラスであることと授業担当教員による差の平準化を意識し、

チームティーチングを導入し、各クラスに3学部から1名ずつの3名の教員が1クラス最大90人（6人×最大15チーム）を担当することとした。

成績評価については、達成目標ごとに観点を設定したルーブリックを導入することとした。成績評価を共通化することと、学生自身に自分の力の長短を意識させるためである。また、スタディスキル導入科目であることを意識し、授業に出席し作業を無難にこなしていれば、4～0の5段階のうち上位から2段階目である評点3を取得できるように意識した。例えば、「①チームの一員として役割を認識し行動」という達成目標については、評価対象として「①チームに貢献する行動」を設定し、評点4：役割を認識、得意分野を生かし行動、3：役割を認識し行動、2：役割の認識や行動が多少不十分、1：役割の認識や行動がかなり不十分、0：チームの一員として行動できない、と評価することとした。そして①～⑥の達成目標から得られる6つの評点から100点満点で提出する成績への換算方法を定めた。

以上の立案を踏まえた地域学ゼミナールの手引き素案を平成27年2月に完成させ、平成28年度からの本格実施に向けて、平成27年度に試行を行うこととした。3月の前期試行担当教員研修を経て、4月から2クラス教員4名で前期試行を開始した。その実践を踏まえ8月に手引きの修正を行い、9月に後期試行担当教員研修、10月から4クラス教員11名で後期試行、平成28年2月に手引き再修正、9月担当教員研修、10月本格実施と進めていくこととした。

3. 平成27年度前期試行の状況

地域学ゼミナールの試行は、卒業所要単位に計上できるように、21世紀教育科目の特設テーマ科目として開講された。テーマ科目は、前期の場合、全学部の2年生以上の学生が受講でき、後期であれば1年生以上の全学生が受講可能である。試行担当教員は、各学部へ前期1名、後期2名ずつの選出依頼を行い、教育開発費として10万円ずつ校費配分することとして確保に努め、平成28年度本格実施時の中核教員となってもらうことを期待している。また、TAを教員1名につき1名ずつ配置することを原則とした。

受講学生確保のため、掲示や担当教員による身近な学生への呼び掛けを行ったものの、前期試行においては①クラス13名、②クラス3名の受講者に止まった。

①クラスの受講学生は13名、2年生が中心で、所属学部は人文学部3名（うち留学生2名）、教育学部1名、理工学部1名、農学生命科学部8名となっていて、全員男子であった。そして4名2チーム、5名1チームの3チーム編成した。

担当教員は、人文学部と農学生命科学部の教員である。実際の授業運営は、手引きを参考にしつつも、毎回学生の反応を見て、試行錯誤しながらいねいに進めて行った点が特徴である。TAとしてグループワークに長けた人材が配置されたこともあり、毎回の授業終了後に、次回の授業をどのように進めるのか教員とTA合わせて4名で意見交換しながら進めて行った。

その結果まず、チームビルディングの工夫として、最初からチームを固定するのではなく、第6回目の授業まで、PBL課題には取組まず、毎回チーム編成を変えながら、グループ作業を繰り返し、学生相互の交流を深めて行った。その過程で、自己主張が強い学生ばかりが発言しがちな傾向が見られたので、第4回目に全員が順番に発言することを繰り返すワンワードというワークを導入している。

同時に、第6回までの過程で、「弘前でデートする際の行き先」「弘前で暮らしていて良い点・気になる点」など地域に関する学生の問題意識をいねいに発掘した。というのも手引きに用意した育児や交流人口というPBLの共通課題を説明しても、学生の反応が鈍かったからである。その結果、学生の意見を踏まえ「除雪」「子育て（幼稚園）」「就職」というテーマを設定して第7回目以降にPBL課題として取り組んでいる。

そして、毎回の授業の最後には、授業中の各チームの作業状況やワークの成果品を踏まえて、教員と

TAからこまめに助言していた点も特徴である。

学外調査についても、第11回目に調査方法を指導、第12回に調査を実施させている。

発表会の評価については、②クラスと同様に③～⑥の達成目標に関してループリックを使用して、受講者と教員・TA全員がチーム単位に評価を実施している。このうち他者平均を③～⑥の成績評価データとして用いている。

②クラスの受講学生はたった3名で、教育学部3年生仲良し女子グループのみだった。そこで2名のTAには受講学生役を担当させて、受講学生チームとTAチームの2チームで授業を行っている。

担当教員は教育学部と農学生命科学部（藤崎）の教員である。可能な限り手引き通りの授業運営を行いつつ、本格実施では90名での運営となることを想定し、教員負担をなるべく小さくするように工夫することを心掛けた点が特徴である。

そのため授業進行は手引き通りに行い、PBL課題は、「子育て」「交流人口」の中から選択してもらった。また、各回の授業中の作業内容について、授業終了時に各チーム1ページのワークシートに、1)各チーム員が作業してきた情報、2)授業中の協議内容、3)次回の授業までの作業分担と、その回の授業の振り返りとして、良かった点、改善点、総合評価について簡潔に記入させ毎回提出させた（図1）。しかし、教員はワークシートの内容を確認するのみで、各チームとも試行錯誤しながら作業を進めていたので、ワークシートの内容についての助言・コメントは差し控えた。ただし、中間報告会の次の授業では、ゲストスピーカーを呼ぶ代わりに、各教員が中間報告内容に対するコメントを10分程度ずつ話題提供し、最終報告への参考としてもらった。また学外調査については教員は行わない前提で全く考慮していなかったのだが、受講学生チームは、最終発表会前に、自発的に関係個所を訪問し資料収集していたことが判明した。

中間発表会と最終発表会では、各チームの報告に対し③～⑥の達成目標に関してループリックを使用して、受講者・教員全員がチーム単位に評価した。このうち他者平均を成績評価データとして活用した。また、中間発表会と最終発表会后に、①～⑥の達成目標に関する達成度自己評価シート（図2）を使用した。このシートにより、1)各達成目標ごとに自己評価を行い、2)自己評価結果をチーム内に説明して他のチーム員からコメントをもらい、3)コメントを踏まえた自己評価の修正という作業を行ってもらった。そして、この自己評価結果をチームの一員としての達成目標①と②に関する成績評価の際の参考資料とした。

4. 平成27年度後期試行に向けた変更

前期試行2クラスの実践を経て、まず、チームティーチングは、授業運営の効率化、価値観の多様化、評価の平準化には有効であることがわかった。

また、前期試行の2クラスの実践を踏まえ、①クラスのようなきめ細やかな運営は90名近い大人数では不可能であるけれども、チーム構築に時間を費やした点や、学生の自発的な関心を課題に据えた点は、大いに評価できるものとして、後期試行に向け授業計画などを変更することとした。

まずチーム構築の時間を増やすため、当初、第1回目のガイダンスの回にチームビルディングも終えて、第2回目からPBLに取り組むこととしていたことを改めた。第5回目からPBLに取り組むこととし、第2～4回目までは、チーム編成を変化させながら、アイスブレイクやグループワーク練習を行い、多様なメンバーとのチーム作業を円滑に進める素地の構築に時間を費やすこととした。

これと合わせて、PBL学習の質よりも体験を重視することとした。このためPBL課題は、教員用手引きに準備した共通課題に限定し、想定される問題解決方策に対する学生の達成状況を評価するのではなく、むしろ学生の自発的な課題設定を重視し、問題解決に取り組んだ体験努力を主たる評価対象にすることとした。これと同時に、受講学生が最低限到達すべき水準をループリックの5段階評価の中心で

地域学ゼミナール② () クラス) 第11回(2015.7.8.) チーム用ワークシート

■チーム名 出席者の学籍番号と氏名(進行役に○、書記に◇)

子育て支援

■課題解決策に関して収集した情報

課題方法 3パターン (弘前市) 子育て支援

相談 { 母子家庭 ... 治療費 親 / 児童養育 / 生活支援施設 / 自立支援給付 / 高齢職業訓練 / 奨励資金
(女解、ホームページ) 厚労省 支出(結婚、離婚の差)

セミナー { 放課後、見守り - 施設の数? というよりは、その人に合った、周りの環境に左右
含む 保育園 児童館 専業主婦が増える 支援策

障害 ... 特別支援学校、8割とこえる学校に設置、微増の傾向
中立・附属病院内に院外学級(病弱)
子どもの人数(減) → 支援学級(増) ... 個別支援が充実
障害に対する理解深まる

■課題解決策

○ 小1の壁、小1プログラム
ワーキングサマー 第2回問題 + 復帰困難、学歴

弘前大学 支援員制度 ワークライフバランス 国の方針
共働き親 家庭 地域 厚労省 育児休暇(男性)
問題点

小学生 数量労働制 効果が認められる

次回までに行う作業

※ PPづくりのために発表の際に使うデータの収集(検討)
・ 実際に市民参画センターなどに訪ねてみる → 足りない情報を補う

■良かった点

・ 大幅な枠組みの流れ、方向性について、決定することができた。

■改善点

・ 観点を絞るためにどのように検討していくか、明確にできなかった。
・ 構成はまだ

■総合評価

(理由) 最終発表まで思ったより、時間がたつたため、作業スピードを上げ、提案内容に深みを持たせるように取り組みを行っていないから。

80 / 100 点

図1. 2015年度前期地域学ゼミナール試行②クラス：進捗状況確認用ワークシート

地域学ゼミナール② () クラス) 第15回(2015.7.29.) 達成度評価シート

学籍番号

氏名

チーム名 子育て

手順1. 各自、達成度評価シートの評価基準表に、初期自己診断結果を黒(青)色で○をつける。

手順2. 初期自己診断結果に対するチームメンバーからのコメントをメモする。

手順3. メンバーの意見を踏まえ、最終自己診断結果を赤色で○をつけ、本人コメントを記載する。

【地域学ゼミナールの評価基準表(ルーブリック)】

達成目標	評価対象	評 点				
		4	3	2	1	0
①学部横断チームの一員として自分の役割を認識し行動できること	①チームに貢献する行動	自分の役割を認識し、得意分野を生かし積極的に行動できる	自分の役割を認識し行動できる	自分の役割の認識や行動に多少不十分な部分がある	自分の役割の認識や行動に不十分な部分が多い	チームの一員として行動できない
②学部横断チームの一員として他者の役割を判断し適切に働きかけることができること	②チームメンバーへの働きかけ	メンバーの個性を把握し、役割分担の判断やメンバーの行動を促す働きかけができる	チーム内の役割分担やメンバーの行動を促す働きかけができる	チーム内の役割分担やメンバーの行動を促す働きかけがややできる	チーム内の役割分担やメンバーの行動を促す働きかけがあまりできない	チーム内の役割分担やメンバーの行動を促す働きかけができない
③地域の問題に関する資料(情報)の検索・収集・整理ができること	③-1 検索・収集	必要な情報と関連情報を豊富に集めることができる	必要な情報を集めることができる	必要な情報がある程度集めることができる	必要な情報あまり集められない	必要な情報を集められない
	③-2 理解・整理	情報を理解・整理が十分できる	情報の理解・整理ができる	情報の理解・整理にやや問題がある	情報の理解・整理にかなり問題がある	情報を理解・整理できない
④発表会で適切な行動ができること	④-1 発表資料作成	体裁が優れた発表資料を作成できる	体裁にほぼ問題がない発表資料を作成できる	体裁にやや問題がある発表資料を作成できる	体裁にかなり問題がある発表資料を作成できる	発表資料を作成できない
	④-2 発表表現	話し方や発表資料の使いなどが優れた発表ができる	話し方や発表資料の使い方にほぼ問題がない発表ができる	話し方や発表資料の使い方にやや問題がある発表ができる	話し方や発表資料の使い方にかなり問題がある発表ができる	発表できない
	④-3 質疑応答	的確な質問や回答ができる	質問や回答ができる	質問や回答があまりできない	質問や回答がほとんどできない	質問や回答ができない
⑤地域が有している課題を発見できること	⑤発見した課題の内容	多様で重要な課題を見出せる	重要な課題を見出せる	重要性が乏しい課題を見出せる	課題の要素を見出せる	課題を見出せない
⑥地域が有している課題に対し、解決策を提案できること	⑥提案内容	価値が高い解決策を提案できる	価値ある解決策を提案できる	価値が乏しい解決策を提案できる	価値がない解決策を提案できる	解決策の提案ができない

■チームメンバーからのコメント

- ① 役割はこなせていた
- ② 人に促すのではなく、各自できていた
- ③ 情報収集はできていたが、理解に若干のズレがあった
- ④ 時間と意識するあまり、省いた箇所があった(グループ全体)
- ⑤ 見出せた…質疑応答○ 提案内容については良かった
- ⑥ 価値はあるよね!

■本人コメント

まず、グループ全体として今回は⑤地域が有している課題の要素を見つけたことで、勢いよく進んだと思う。また、情報の理解や整理の収集がつかなくなったことが原因としてあげられる。

個人としては、発表までの作業のなかで、班員とのテーマ内容を検討していて批判的な意見を何度か言っていた。パワーポイント作成するにあたり、協力しなんとか相手に理解してもらえように取り組めたと思う。

図2. 2015年度前期地域学ゼミナール②クラス：達成度自己評価シート

ある評点2とし、達成目標①～⑥の評点の全項目で評点2以上であれば「優」以上の成績を与えることとした。

②クラスで使用したワークシートも、今後の授業に有効活用できるものと評価されたので、様式を定めた。中間および最終発表会の評価シートは②クラスのものに準じたシートとした。達成度自己評価シートは②クラスのものに準じて、授業開始時と中間、最終の3回用いることとした。各回の授業での進行管理については、A4判1ページに15回分の授業記録を個人ごとに記録させることとした。

そして、学部横断でチーム編成をした場合、授業時間外のチーム作業について、時間調整が非常に困難であることも確認できた。特に、発表内容の意見交換に授業中の時間を費やしてしまい、発表会に向けたスライド準備を授業時間外にやる傾向が見られたことから、発表内容の充実と並行して、発表資料準備についても授業中に着実に進捗させるような授業運営への留意を手引きに書き込み、教員に意識させることとした。

5. 平成28年度本格実施に向けて

前期試行では、以下の点が未解決のまま残っている。

まず90名近い受講学生による15に近いチームについて、3名の教員と3名のTAのチームティーチングにより、チーム構築とチーム作業が円滑に進むようにファシリテートできるかどうかは、未知数のままである。またPBL課題を共通課題ではなく、学生の自発的な課題設定を基本とするように方針転換したが、このことにより多様なテーマが乱立する可能性があり、教員・TAによりファシリテートの困難さが増すおそれがある。

次に、学外調査についても大きな問題である。①クラスは教員主導で導入し②クラスでは学生が自主的に実施していた。地域に関するPBLとなると、熱心な学生ほど現場と接触したくなるのは、当然である。現時点でも原則行わない方針だが、地域への負荷を掛けず実施できる方策がないかどうか、引き続き検討していく必要がある。

後期試行は4クラスで実施されている。この実施経過も踏まえ、平成28年度の本格実施に向けて、着実に準備を進めて行く予定である。